

■演目
 廓^{くわら}文^{ぶん}章^{しょう}
 野^の崎^{さき}村^{むら}
 梅^{うめ}の由^{よし}兵^べ衛^え
 奥^{おう}州^{しゅう}安^あ達^だ原^{はら}
 鏡^{かがみ}山^{やま}旧^こ錦^{にしき}絵^え

歌舞伎の魅力・シリーズ2



「鏡山旧錦絵」より
 中老尾上(中村歌右衛門)

女おんな方がた

カラー・三十二分・二〇〇,〇〇〇円

文部省選定

■主な出演
 市川 左団次
 尾上 梅幸
 澤村 宗十郎
 澤村 田之助
 実川 延若

中村 歌右衛門
 中村 勘九郎
 中村 勘三郎
 中村 又五郎
 坂東 玉三郎

■企画 国立劇場
 ■製作 桜映画社
 ■資料提供 出光美術館
 謝人 静嘉堂
 謝人 徳川黎明会
 早稲田大学演劇博物館
 (五十音順)

■解説

歌舞伎には女優はいない。女性の役を演ずる俳優も、すべて男性である。そして女に扮する俳優のことを「女方」俗に「おやま」とも呼んでいる。

この映画では、歌舞伎に固有の女方芸の発生、展開、その伝承と創造の過程を描きながら「女方」が三百年を越える歴史のなかでつくりあげられてきた独自の美しさを追求している。

「女方」は、女性だったら気のつかない女らしさを、鋭く、的確につかみ出し、それをやや誇張した表現によって、歌舞伎の様式化された演技のなかに、うまく生かしている。

「女方」の演じる女性は、現実の女性を越えた、男でなくてはつくり出せない女の美しさと魅力をもっている。そして、その芸は歌舞伎の演技の中で大きな位置を占めているし、歌舞伎の特色となり、魅力になっている。



「廓文章」の傾城夕霧(坂東玉三郎)

■ すいせんの言葉

早稲田大学教授 河竹 登志夫

ながいこと待っていたカラー映画「歌舞伎の魅力—女方—」が、いよいよ完成しました。先に出た「演技篇」もみごとな出来ばえで、私自身つい先頃客員教授として赴任していたウィーン大学の学生に、それを見せながら講義をしてきたばかりですが、たいへん喜ばれ、歌舞伎美の理解に非常に役立ちました。なんといっても芝居は生きて動き、瞬間ごとに創られていくもので、しかも歌舞伎は色彩美、絵画美、造型美が絶対の比重をもつ芝居ですから、カラー映画がどんなに大きな力を発揮するかは、いうまでもありません。

しかも今度は、さらに「女方」に的がしぼられています。いわば総論につづく各論の第一弾で、それだけ

に断片的な、レストランの見本棚のような総花式でなく、女方の典型的な役柄、それぞれ各様の演技、着付、メークアップ、舞台面の実写から、楽屋での仕度風景、修業、稽古のありかた……等々、「女方」というものをあらゆる面から、じっくりと、密度高く描きあげ、その本質を的確に美しくとらえているのです。

女方——男が女性を演じるという方法自体は、歌舞伎だけのものではありません。西洋でもギリシャ劇以来ルネサンスまではそうだったし、日本では伝統演劇のすべてがそうです。けれども歌舞伎の女方は、まったく類のない、独自のもの。それはシェークスピア時代のように少年俳優がただ女子のような声でしゃべったり、能のように仮面で女性を表現したりするのではなく、はるかにリアルに、しかも単なる女性の模倣でなく女性自身には気づかない女性美の本質を、するどく美しく「生きて」表現するからだといえるでしょう。

おそらくそれは、歌舞伎がその初めは女優（出雲の阿国）によって演じられたからだだと思います。まもなく風俗を乱すとの理由で幕府に禁じられ、女方の芸が成立せざるをえなかったのですが、いったん本当の女優の魅力味わってしまった江戸時代の庶民観客は、本当の女性にまさるともおとらない美しさ、やさしさ、なまめかしさを求めてやまなかった——それが「平生を女子にて暮せ」というきびしい芸道修業を生み、今日みるような比類のない様式を完成させたのでした。

こうして創られた女方の美こそは、歌舞伎の粋であり、いのちだといえましょう。この映画には、女方芸の基本とされる傾城（遊女）から、尽くす女、耐える女、たたかう女、愛する女など、歌舞伎に登場する典型的な女性像が、歌右衛門、勘三郎、田之助、玉三郎、勘九郎……などベテラン、花形の俳優によって、たっぷり描かれます。

単なる紹介や解説にとどまらず、りっぱな芸術鑑賞であり、しかも日本女性美の再発見にもなっている——ここにこの映画の特色と意義があります。国内はもちろん次の海外講演にも、むろんこれを持って行こうと思っています。

■ 内容

襖が次々と開いて、傾城の夕霧（名高い遊女）が登場する。「廓文章」美しい髪と華やかな彌福といういでたちの夕霧は、今はおちぶれた大家の若旦那伊左衛門に、せつない心のうちを訴える。

映画は伝統を現代にうけついでいる「女方」の化粧の仕方、役づくりの苦心、きびしい稽古風景などから、「野崎村」の舞台に入っていく。化粧、稽古、舞台と、このへんは映画ならではの楽しさをつくり出している。

野崎村のお光の、かれんでややコミカルな娘から、ついで歌舞伎が生み出した女性像のいくつかを、その名場面をとらえて紹介する。

女方が追求した女性像は、容姿が美しいばかりか、心もひたすら美しくなければならなかった。

「奥州安達原」の袖萩は、謀反人安倍貞任を夫に持ったがために、久しぶりに訪れる父母の家に入ることを許されない。

「梅の由兵衛」の女房小梅は、自分が指を切って夫の



「鏡山旧錦絵」より中老尾上（中村歌右衛門）と岩藤（実川延若）

代りに罪を負おうとする女だった。（夫の由兵衛は金の工面に困って人を殺す。その時相手に小指を噛み切れられ、それが証拠となっている）

最後の「鏡山旧錦絵」は、主だった役がすべて女という、めずらしい演し物である。御家転覆を謀る局の岩藤と、それを阻もうとする中老の尾上。その尾上が姫から預かっていた大切な名木が岩藤の草履にすりかわっていたことからやりとりがあって、尾上は岩藤に大勢の前で、その草履で打ちすえられるという恥しめをうけて、死を決意する。何事かを決意して、思いつめた表情で花道を去って行く尾上の姿で映画は終る。

■ 製作スタッフ

企画	国立劇場	撮影	木塚誠一	撮影	土村四四六
製作	村山英治	"	村山和雄	"	加藤和郎
脚本	北条明直	"	金山富男	"	原田英昭
演出	萩野正昭	"	北川英雄	解説	川久保潔

製作

株式
会社

桜映画社

東京都渋谷区代々木1-57-1 代々木センタービル
〒151 TEL 03(3320)6311 FAX 03(3320)7666

配給